

末黒野

すぐろの



11月号
(通巻891号)

今朝の秋

森清堯

雨を見ぬ日のなかりけり七月尽
夏茜さまよふやうに法の庭
したたりの岩棚にあるくぼみかな
梅雨明や森に諸声ふくらみて
産土の社を揺さぶり蟬時雨
白南風や旅心湧く蒼き峰
浜木綿や潮騒とどく無人駅
白南風や遠き阿夫利嶺はれやかに
滝音のなほ高めある山気かな
ひと本の風樹に聞きぬ今朝の秋
寺町の匂ひも音も涼新た
朝顔の紺の一輪他を寄せず

瑞声

落し文

黒滝志麻子

(顧問)

蟬の声くぐりて森の深さかな
落し文里のポストに入れてきぬ
飛石を設ふテラス月涼し
吊忍一期一会の島の人
無人駅の七夕飾り海の風
早稲の香の動き一番バスの発つ
東雲の光ひき合ひ牽牛花
鬼灯に夕日の色の集まりぬ

甲矢集

配列は音順（月毎の循環）



台場跡

石黒興平

黒松の木下闇濃し台場跡
驟雨来て一舟動く気配なく
本堂に籠もる雲竜梅雨深し
相輪の黒く浮きたり大夕焼
蔵涼し価値のわからぬ物ばかり
艦橋の窓いつぱいや雲の峰
麻暖簾の家紋大きく茶道具屋
補聴器の電池切れなる暑さかな
山の日の山隠れをり霧の朝
桃ひとつ剥いて朝餉の豊かなる

メロン切る

岡野里子

鱒二忌や雨くれなゐの野萱草
万緑を四囲に木道一直線
樹下に坐し風を待ちをり不如帰
乱鶯の背山妹山めぐりかな
里山のまだきに暮れて合飲の花
暁闇の遠より鴉声土用東風
だらだらと過ごす身囁す蟬の声
風鈴や夫の手借りて髪染めて
ニニ・ロツソのトランペットや耳涼し
網の目は地球の迷路メロン切る

梅雨の月

菅野日出子

梅雨寒や近くを過ぐる救急車
外出の自粛に厭きて梅雨の天
夫の忌へ冷酒一献二人の夜
書に更けてベッドにそそぐ梅雨の月
縮緬の波寄す入江夏夕焼
妖艶に一ト夜を咲きて烏瓜
天神の銅の日時計梅は実
初秋とは名ばかりの空花萎えて
語りたきことの山程敗戦忌
亡き師との追憶たどり思草

盆

田中臥石

海霧這つて暗き港の駅舎跡
ながらみを搔くや腰まで青葉潮
青葉潮貝搔き人の命棒
初鳴きの慈悲心鳥と思ひけり
浜おもと妻と相病みゐたりけり
草の花指して名を挙ぐ歩行杖
朝空にどんと雲置く原爆忌
鰯干すいさば女の腰強し
墓の径妻とふたりの迎へ盆
句座開く友どち盆の十五日

蟬しぐれ

森清信子

幸せを買うたる気分さくらんぼ
手は器手は楽器ともハンモック
なほざりにせしこと多し夕河鹿
手洗ひの泡立つシャボン蟬しぐれ
風と売る百の風鈴千々の音
飯の世を急きて騒がし油蟬
せせらぎや手品めく湧く糸蜻蛉
仰向けの油断のならず兜虫
雲の峰修道院より鐘の音
あともどりできぬ歳月萩の風

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



落し文 長尾タイ

落し文胸の鼓動を地に返す
茅葺きの暗き軒下蟻地獄
夏萩の風に寂しさ流しけり
明けやらぬ楠の大樹や蟬時雨
ざりがにや母の釣果を自慢の子
鳴鳧の子の観察日記一行目
歳時記に四つ葉しをりて夏果つる

青田 高木邦雄

暮の夏 今村千年

梅雨明の残月白き相模灘
満目の青田貫ぬく鉄路かな
濃き日差し日傘一つの老夫妻
溪流や瀬音を凌ぐ滝の音
日を弾く白き灯台青岬
大空の青の深さや今朝の秋
まつすぐに空突く大樹法師蟬

到来のふる里の香や青山椒
籠り居の庭に親しき墓
いつ見ても走つてをりぬ走馬灯
すれ違ふ夏のマスクや心当て
ふる里へ飛行機雲や暮の夏
帰省子の目許口許よそよそし
秋立つや屑箱にある旅プラン

蟬の声 及川照子

はらからとひもとく記憶蚊帳吊草
一人居の朝の目覚めや蟬の声
周平の名作偲ぶ蟬しぐれ
晩年の生き方如何に夕焼雲
いねかての旅の流星富士の嶺
大漁を心待ちして鱚雲
翼張る白鷺城や天高し

秋の蛩 太田良一

裏山のふくらむ朝や蟬時雨
棧橋や夜風に流す洗ひ髪
峰雲やとつくに捨てしころざし
せせらぎの音を消したる蛩かな
友逝けば那須野に秋の蛩かな
ひらがなの祖母の乱れ字終戦忌
初顔の茶髪加はる墓参かな

ぼい 小田嶋野笛

焼茄子や食ひ道楽の父偲び
もひとつを捨てられもせず籠枕
箱釣の破れぼいもてあと二匹
やまひだれの並ぶ日記や夏の果
稲妻の曲り鋭き三画目
オルゴールの溜息こぼす秋暑かな
雑念の束を燃やしぬ迎盆

夏椿 加藤静江

川風やはや錆色の七変化
一花散り一花ほころぶ夏椿
単線の窓より抜くる青田風
切通し日の斑と紛ふ黒揚羽
傷めたる右手の重さ夏の雨
物忘れの事など言ひて心太
秋草や深き澱みの心字池

ルージュ 大川暉美

いち彙んの雨気を孕める四葩かな
梅雨の夜や合はぬラジオの周波数
晴ればれと塗りたるルージュ梅雨明けて
風にふれ風のかたちに含羞草
夕涼や鐘の余韻のをんな坂
宵涼し浦廻の明かり真向ひに
嫋嫋と風渡りけり稲の花

髪洗ふ 岡田史女

朝よりの晴極まりぬ蟬時雨
白じろと驟雨過ぎゆく棚田かな
髪洗ふ白日に実をさらしきて
おとろふる視力や極暑おろおろす
戻りきて青葦原のざわめけり
震災の遺跡レンガの灼けてをり
新涼の風の中なる木椅子かな

草虱 斉藤マキ子

茹でもろこし昼餉に付きて快復期
草虱つきて愉しき試歩となる
気がかりのふと声に出て秋の暮
さらさらと茶漬の欲しき残暑かな
秋早咽をしぼれる栗鼠のこゑ
ナースステーション人恋ふいろの秋灯し
黒々と天狗住む山いなつるび

梨園 堺昌子

公園のみんなの声風騒ぎ
生り年のトマト赤赤空晴れて
みんなみやまだ鳴きやまぬ山の路
風をよぶ水車小屋より蟬の声
夜の秋露天風呂より星数ふ
雨後のふくらみきれ実梅かな
梨園や風にゆるるよ重さうに

青炎集

森清 堯選



横浜 新倉ゆき江

歓声の上がるビニールプールかな
やまかがし訪ふ庭や十年ぶり
日記帳の変化無きままそのひぐさ
ギヤマンの花器に疎しき造花かな
薄板の重き塔婆や墓参
むらさきの醤油の光る鯛かな

横浜 小林清子

麻の葉の初着より足夕涼し
夏足袋や疲れを見せぬ師の背中
コンビニに釣り餌の旗や朝曇
緑蔭やリュックに帽子かぶせ置き
提灯の菊の御紋や名越月
広島忌被爆ピアノの歌に和し

横浜 山崎稔子

青鷲や冠羽吹かれて身じろがず
万緑の風のもてなしにぎり飯
木洩れ日を追ふかに飛べり黒揚羽
初蟬や日ざしの戻る庭の樹々
何するもいつも殿蝸牛
なめくじらノノと何処行く

横浜 和田慈子

昼暗きロツジ松蟬鳴き競ひ
梅雨上る雲を払ひて夜半の月
高階の空を自在や夏燕
烏帽子岩に寄する白波夏深し
山の日の峰のはるかや虫すだく
風に揺れ暮色に熟れて式部の実

横浜 小沼糸み子

花莫座の寢息かすかの嬰子かな
五月闇昼と夜とを違ふる児
四つ目垣に雨靴干され梅雨晴間
原色の服吊るす居間梅雨長し
掛軸の師の句の色紙冷酒酌む
何処よりカレーの匂ひ夏の夕

横浜 六崎正善

半夏生天地異変の凄まじき
早暁の雨に色濃し百日紅
初蟬や木立の風の向かうより
釣人や沼の畔の未草
かぶり付く冷しトマトの匂かな
気紛れなる風を待ちたる端居かな

横浜 飯田久美子

沈む日をしばしとどめて月見草
冷房の折合ひつかず夫と妻
先月と打つて変はつて極暑の来
かぶりつく昔おやつの青胡瓜
白髪の我に驚く帰省の子
じやんけんよ大中小と西瓜切る

狭山 沼崎千枝

合唱の音程狂ひ巢立鳥
ジャージの乳搾りある牧涼し
大金蠅牛の尻尾に打たれけり
一人おきの座席役者の所作涼し
耳鳴りを忘れてをりぬ日雷
盆用意手順違はぬ白髪夫

横浜 小嶋紘一

刈払機どくだみの香にわけ入りぬ
生きてゐる今が大切カナナ燃ゆ
かなかなやとぎれとぎれに日の暮るる
芙蓉閉つ暮色ひしめく阿弥陀堂
無花果食ふながしに水のあふれぬて
賜りし句集に朝日林檎むく

横浜 山口郁子

塵出す子の寝乱れ髪や夏休み
病葉の目立つ桜の影うすし
受皿に残る打水雀浴ぶ
いちどきの蟬声閑を告ぐるやう
絵提灯のあかり華やぎ魂祭
行き合ひの雲の高さや秋めきぬ

耕 土 集

岡野 里子



ベランダや珈琲を手に風を聞き
霊園に夏雲の湧く雨上り
日盛や海への坂の風清し
竹林の日差しゆるるや黒揚羽
無言館の絵画は遺言終戦忌

横浜 滝口 洋子

怪鳥めく鳥の声や雲の峰
東京の遠くなりけり草田男忌
出番なき豪華客船夏の果
秋立つや大樹は塔の道しるべ
挟まれる行動の域秋暑し

横浜 大内 由紀

寝そびれて庭に佇み夏の月
敗戦忌置に拾ふ吾の白髪
朝食のバナナしみじみ敗戦忌
蹠の白き男の浴衣かな
菅貫や社務所に危坐の老宮司

横浜 小原 紀子

梅の雨路地に聞こゆる三味の音
赤子ほどの青きあぢさゐ雨を待つ
朝まだき鳥の声立つ梅雨の空
なめくぢの画く地上絵銀の線
日差し跳ぬ梢に黒き揚羽蝶

横浜 宮崎 浩美

梅雨晴や紐を通せるニューシユーズ
レシピア見て塩を多めの夏料理
浜木綿や砂に四駆のタイヤ跡
浮草や池塘の夢の覚めやらす
朝獲りの鰯のなめろう生一本

横浜 松川 昌義

水虫と別れて久し靴に黴
長雨と別れたばかり炎天下
晩酌の主役とりたる胡瓜揉
滑舌の良き御喋りや夏帽子
朝顔の明日を秘めたる蕾かな

横浜 小長谷 紘

野も山も夏一色に染まりけり
夏風邪や疑念拭へず自粛せり
明け方や篠突く雨と雷鳴と
姥捨や棚田をくだる青田風
瀬戸の塩かけて三浦の西瓜かな

横浜 杉山 善信

雨止みて一斉に降る蟬時雨
炎熱の地表や確と草の丈
全山の水を集めて飛瀑かな
蛸や早瀬の音に掻き消され
丹沢の山の黒黒秋の空

横浜 鈴木 英雄

急逝の母の漬けたる梅を干す
ハンカチは薄紫や妣が染め
風鈴へ風来るを待つ茶店かな
蓮池や子供ら遊ぶ声せはし
山盛りの冷さうめんの昼餉かな

横浜 玉川 利江

濃淡の雲の流るる夏野かな
まだ飛べぬ烏揚羽の濡れ羽かな
仏壇のメロン香の満つ昨日今日
でむしやどこまで上る光る跡
眼尻に瑠璃色残し蚯蚓消ゆ

横浜 秋山 文子

アラートも自粛も慣れて秋を待つ
部屋毎の主役になりぬ草の花
たたき出す大水輪や鬼やんま
蓮の実の飛び立つ池や音微か
精一杯鳴いて暮るるや秋の蟬

横浜 喜田 君江

煤けたる古民家の土間風涼し
風戦ぐ展望台や夏の家
雨よぎる校庭の草いきれかな
連日の子らの奇声やプールより
物干のタオルにすがり秋の蟬

横浜 津野 桂子

窓際に揺るる赤べこ百日紅
校庭に少年野球梅雨の明
猛暑日のいざ買出しや特売日
底紅や表札の無き家の庭
笑みかはず馴染の宮司秋日傘

横浜 大庭美智代

噴水の飛沫に秘むる藻の香り
門柱に繋ぐ老天花石榴
日々無聊蟬の初鳴き記し居り
冷奴水草柄のガラス鉢
一合目二合目ゆるり富士登山

町田 中野千代子